

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月28日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2012

課題番号：21520569

研究課題名（和文） 社会認知的アプローチに基づく教室内第二言語習得と動機づけの国際比較研究

研究課題名（英文） International/cross-cultural comparative research on Second language acquisition (SLA) and L2 learning motivation from a sociocognitive perspective

## 研究代表者

木村 裕三 (YUZO KIMURA)

富山大学・大学院医学薬学研究部（医学）・教授

研究者番号：80304559

研究成果の概要（和文）：本研究は、教室内の第二言語（英語）授業を研究対象とし、教師がプロジェクト型グループ学習(PBL)という、予め決められた手続きによる授業展開によって授業を展開した際に、生徒は英語をどのように習得するのか、また、その際に教師と生徒は英語の授業についてどのような動機づけを抱くのかを、東アジアの3つの高等学校において分析・検証した研究である。その結果、各高校の教師は PBL 型英語授業に強く動機づけられて授業を構築し、各高校の生徒はグループ学習による豊かな議論と様々な社会的道具によって英語を習得する過程が浮き彫りとなった。

研究成果の概要（英文）：The current research aims at interpreting how English teachers' teaching motivation and students' learning motivation change through experiencing a series of project-based learning (PBL) in their classrooms. The data came from three different high schools in three different regions in Far East: Toyama (Japan), Suwon (South Korea) and Beijing (China). The narrative interview data were interpreted qualitatively from a sociocognitive perspective. The result reveal very positive change in motivation for both teachers and students in all three regions over the period when PBL group work was conducted. Particular refer is made to English language acquisition from a sociocognitive perspective in that group work in every classroom offered rich sociocognitive affordance for students' final writing projects, and thus students from each classroom made significant progress in their English language writing through a rich group discussion environment.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・第二言語習得理論

キーワード：社会認知的アプローチ，第二言語習得，質的動機づけ研究，

### 1. 研究開始当初の背景

英語学習の動機づけ研究は、世界的潮流であった 90 年代の量的アプローチ中心の捉え方から、質的アプローチによる描写への関心と試行へ拡大しつつある。そのような中で、本研究者はこの報告書で報告する前の科研費研究（2006 年～2008 年度，課題番号 1840428，「韓国・中国の学校英語教育現場における教師の動機づけに関する基礎研究」）において、半構造化インタビューによる英語教師の質的動機づけ研究を展開してきた。研究を進めるに従い、あらたに 2 つの課題が明らかになり、これらの課題を探索するためには、2006 年～2008 年の科研費によるこの研究を進化発展させた新たな研究を計画する必要性が生じてきた。具体的には以下の 3 点である。

まず、2006 年～2008 年の研究では、単発の英語授業を対象とし、教師の英語授業に関する動機づけを研究対象としたが、元來動機づけ研究は長期的視点に立った動機の変容を捉えることが重要であるため、1 つの研究サイトにおける研究期間の長期化を必要とした点。2 つめは、2006 年～2008 年の研究が韓国と中国の学校現場を研究サイトとし、それぞれの英語教師の授業をコントロールすることなく分析したが、本研究は、プロジェクト型グループ発表授業(PBL)という共通した授業展開法を富山、水原、北京の 3 つの高校現場に適用した点。これによって同一手法による国家間の教師の英語授業への動機づけと国家の英語カリキュラムとの関連性を探索できるようにした。そして 3 つめに、研究背景である学習理論が進化した点。具体的には、2006 年～2008 年の研究では社会文化理論や状況理論を援用していたが、本研究では申請当時萌芽的理論として注目されつつあった「社会認知理論 (Sociocognitive Approach)」を援用理論とした点である。これらを研究背景として本研究を開始した。

### 2. 研究の目的

東アジア 2 か国の高校段階の学校英語教育現場を長期的に観察参与し、特にプロジェクト型グループ学習の英語授業による学習者と授業者の動機づけがどのようなプロセスで進展するのかを、第二言語習得の社会文化的要因と認知的要因を視野に収めた、社会認知的アプローチによって究明する。

### 3. 研究の方法

本研究は、4 年間にわたり下表の計画表に従って現地での研究打合せ、現地参与観察から論文執筆・報告書作成までを一括にして実施した。1 回のプロジェクトの課題提示からグループ発表までの期間は各教室によって

異なり、富山の場合、1 回のプロジェクトは 4～5 回の授業で構成され、約 3 週間かかったが、韓国・中国の教室では、滞在期間の制限から、1 回のプロジェクトに 3 日を費やした。

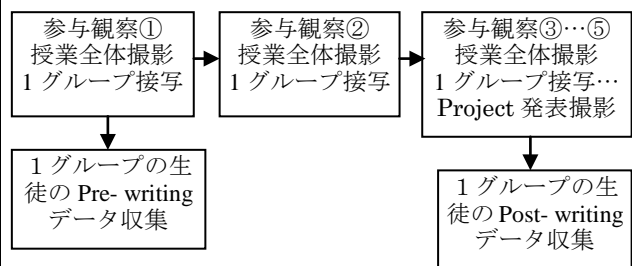
現地	H21	H22	H23
富山	◎㊦◎㊦◎㊦	◎㊦	
韓国	■ ■	◎㊦◎㊦◎㊦	◎㊦ ◎
中国	■ ■	■ ■	◎㊦◎㊦
分析	←		
学会	✓* ✓	✓ ✓	✓ ✓
論文	✓*		

現地	H24
富山	
韓国	㊦ ◎㊦
中国	◎㊦◎㊦◎㊦
分析	→
学会	✓ ✓
論文	✓

◎：参与観察・データ収集  
 ㊦：データ整理  
 ■：研究打ち合わせ  
 ✓：実施時期

1 回分の参与観察，データ収集手続きをまとめると以下ようになる。



データ分析方法手続きは以下のとおりである。

- (1) 授業の発話プロトコルテキスト作成
- (2) stimulated recall の箇所を選定
- (3) 半構造化インタビュー実施
- (4) インタビューテキスト文字起こし
- (5) 複数の分析者によるノード化
- (6) NVivo 9 による動機づけ解釈

参加校は 3 か国ともに後期中等教育機関、すなわち日本の高等学校に相当する学校である。富山は私立高校 (3 学年 26 クラス 867 人)。韓国・水原は公立外国語高等学校 (3 学年 5 カ国語学科 24 クラス 641 人)。中国・北京は大学付属 (高級) 中学高級中学 (日本の高校に相当、3 学年 30 クラス、1,753 人)。各国サイトでの授業実践と教師、生徒への半構造化インタビューは以下のとおり実施された。

#### 富山サイト

富山サイトでは本科研費による研究に先立つ H20 年度に別の競争的研究資金を得て研

究を先行実施していたため、2年間を通じて異なる2名の教師(教師A, 30歳代男性;教師B, 40歳代男性)の実践と、その実践における3名の生徒についての分析が可能となった。3名の生徒は2008年時2年生であった。分析対象のプロジェクトは以下のとおりである。

#### 教師A

Cartoon Project (2008/5-7)  
Creative Writing Project (2008/10-11)  
Feeling Pains of the Disabled (2009/1-2)

#### 教師B

Inventing New Product (2009/6)  
Meeting ETs in Outer Space (2009/10-11)

半構造化インタビューは教師、生徒ともに卒業後の2011年1月に実施された。

#### 韓国・水原サイト

教師C(30歳代男性)は今回のプロジェクト参加に快諾を示した気鋭の有能な若手教師である。分析対象となったプロジェクトは以下のとおり。

#### 教師C

- 1) Organizing a Field Trip (201/7)
- 2) Creative Poems (2010/11)
- 3) Making an English Newspaper (2011/7)

それぞれのプロジェクトは3日間、正規の授業が終了した放課後や夜の自習時間を利用して実施された。参加生徒は1)27名, 2)27名, 3)18名。生徒は全員1年生。専攻は中国語, 日本語, 英語である。このうち, 初回から最終回のプロジェクトを通して, 5名の学習者に固定して参与観察を実施した。教師と生徒への半構造化インタビューは, 1)については2)の期間中に, 2)については3)の期間中に, 3)については2011年11月に実施された。

#### 中国・北京サイト

北京サイトに参加した教師D(30歳代女性)は, 本研究者が2005年以来研究上交流のある高校の英語教師であるが, 今回未経験のPBLグループ発表型授業を, 1クラス60名近い環境で実施することに意義を見出してくれた。分析対象としたプロジェクトは以下のとおりである。

#### 教師D

- 1) Live Style Project (2011/9)
- 2) Designing a Travel Brochure (2012/5)

いずれのプロジェクトも教師Dの普段の英語の授業を3コマ利用して実施された。対象クラスは1年生1組60名。このうち4名の生徒に固定して参与観察を実施した。教師と生徒へのインタビューは, 1)については2012

年2月に, 2)については教師につてを2012年9月に実施し, 生徒については尖閣諸島に係る外交問題の影響を受け, 教師と同時に実施出来ず, 2012年12月に実施した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 富山サイト

①PBLグループ学習の接写画面を分析した結果, 生徒間における相互作用(顔の表情や身体動作を含めた動態, 言語による教え合い)が, プロジェクトレポートの成果である英文表現に好影響を与え, 英語習得における生徒個人個人の認知的側面が他者との社会的相互作用と密接に関連する様子が浮かび上がった。

②3名の生徒は, 教師A, 教師BのそれぞれのPBLの取り組みに対し, 興味関心を持って取り組んだ。特に, PBLによるグループ学習から得られる英語学習への高い動機づけは, 3名の学習者の将来への展望にも大きな影響を与えていることが判明した。

③教師Aが設定する多様なプロジェクトに対し, その主題の意義を積極的に見いだせたプロジェクト主題と, 主題そのものの難度が高く, また高校生の課題としてもその意味づけに苦勞するプロジェクトがあることも判明した。

④一方, 教師Aにとって, PBLで扱う主題は, 必ずしも生徒が在学中に展望可能な主題だけに留まらず, 生涯をかけて探究すべき普遍的な主題も敢えて設定することでより深い意義づけをするという動機を持っていることが判明した。

⑤教師Bは採用後まだ日も浅く経験が短いにもかかわらず, 3名の生徒の3年次の学級担任とPBLグループ学習の英語担当という重責を担いながら, PBLグループ学習を構築する上で, 生徒からのフィードバックを足場にしたがって授業を構築する動機付けとしていることが判明した。

⑥その一方で, 教師Bが生徒のプロジェクト発表に際し, 発表スクリプトを完全に暗記するかしないかについて, 生徒の達成度に任せる発言があるのは, 学校全体の統一的Can-doリストが未定であることが一因であり, 今後のこの高校における英語教育の方向性を示唆するものとなった。

##### (2) 韓国・水原サイト

①教師Cは, マルティメディア(音楽TV, ルーレット, あみだくじ等順位づけコンピューターフリーソフト)を援用した授業が得意であり, これらのマルティメディア教材が授業のタスクの現実感を高め, 参加した生徒の英語学習を強く動機づけていることが判明した。

②参加した生徒のうち, 分析対象となった4

名の生徒は、日頃の英語授業が大学入試準備中心の形態であるのに比べ、本研究のために準備された授業では、英語をコミュニケーションの道具として使いながらも英語のライティングの上達を目指した授業であった点に強く動機づけられていることが判明した。

③教師Cは本授業構築に際し、生徒の大学入試にも役立ち、しかも教師にとっても意味のあるタスクを設定することを動機として持っていることが判明した。

④PBL型グループ学習時における4名の生徒の接写画面を社会認知的アプローチに基づいて分析した結果、4名の生徒の第二言語(英語)習得について、生徒同士の手振り、動作、アイコンタクトといった、社会文化理論ではscaffoldingの枠外として捉えられる微細な動きが社会認知的アプローチでは分析対象となり、その結果、これらの微細なscaffoldingが生徒の活発な議論を誘発し、英語ライティングの創造性に好影響を与えていることが判明した。また、結果として完成した英文ライティングには、peer collectionが有効に働いたことが確認された。

### (3) 北京サイト

①教師Dにとって本研究への参加の動機は、PBL型グループ学習形態という未経験の授業実践に挑戦し、自身の英語授業の幅を広げる点にあったことが判明した。その目的どおり、今回の経験は有用で、60名規模の授業では頻繁には実施できないものの、生徒にとっても非常に有用な授業実践であると実感したことが判った。

②教師Dの教材について、2005年、2007年時の単発授業の参与観察時の教材に比べ、今回の授業では、3コマの授業の中で「聴く」、「読む」、「書く」、「話す」という4領域の活動をうまく盛り込まなければならず、この点で教材についてはタスクの統合化が肝要であり、教材の進化もこの点が反映していることが判明した。また、1回目のプロジェクトより2回目のプロジェクトの方が、教材のステップ化が進化しており、平易→難へと無理なく学習が進行する工夫が随所に施されていた。また、生徒のインタビューからも教材のこの配列についての意見があり、自分で気がつかないうちに無理なく深い議論へと誘ってくれる教師Dの教材に強く動機づけられている点が判明した。

③伝統的な中国の英語授業と比べ、PBL型グループ学習における教師の役割は、絶対的権力を持った「教える師」から「支援者」「補助者」への役割が期待されるが、この教師の「支援者」「補助者」へのシフトは、現代の中国教育改革とも合致したシフトであり、教師Dにとってその切り替えが難しい感があっ

たことが判明した。

④教師Dが限界を感じている通常の英語授業での英文ライティング指導が、本PBL型グループ学習授業では実現できた点が、教師Dの英語授業構築への動機付けに好影響を与えていることが判明した。

⑤PBL型グループ学習への教師と生徒の動機づけは、個人学習を基盤とした通常の英語授業にはない、協働性にあることが最も大きな要因である点が確認された。また、この協働性は、初回より2回目のPBL型グループ学習の方が高度になっていることが生徒のインタビューからも判明した。ことにこの協働性を核とした授業形態は、地方の初級中学(日本の中学校に相当)をトップクラスで卒業し、北京の進学校に進学した高校1年生の生徒にとっては極めて新鮮で、英語をコミュニケーションの道具として使う授業に強く動機づけられたことが判明した。

⑥グループ学習の接写データを分析した結果、4名の生徒のライティングの質が3日目の最終発表が近づくにつれて急速に向上していく過程が浮き彫りとなった。ことに、社会認知的アプローチによるナラティブ分析から、リーダー的存在の生徒の知とオンラインで活用できるスマートフォンからのウェブの知、そして、元来これら4名の生徒が持っている、中国各地方の初級中学でのトップ層の学力知生徒の英語習得への認知が、豊かなグループ討論を通じてライティングへと反映される課程が明らかとなった。

⑦大学入試という要因が、北京においても教師・生徒の双方の動機づけに微妙な影響を与えていることが判明した。教師Dにとっては、今回のPBL型グループ学習で得られた経験は少なからぬ貴重なものであることが判明したが、北京の有名大学に送り込む生徒の数が高校の発展に直結する中国の後期中等教育機関の現況では、今回のPBL型グループ学習は、彼女が勤務する高校での主流の実践に据えることはできないことが判った。また、生徒にとっても、確かにPBL型グループ学習によって協働性が養われ、本来の英語使用の目的が体感できるこの授業展開に強く動機づけられていたが、大学入試のための授業への渴望も持っており、英語は元来好きだが、中国社会の中で成功しなければならないという、北京の高校生のダブルスタンダードを好む好まざるにかかわらず包含しなければならない現実が浮き彫りとなった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① Jangho Won & Yuzo Kimura,

Enhancing creativity and motivation through a project poem. 第38回全国英語教育学会愛知研究大会予稿集, 査読なし, 2012, pp. 418-419.

- ② Yuzo Kimura & Jangho Won, Second language acquisition and teaching/learning motivation: A sociocognitive perspective. 第38回全国英語教育学会愛知研究大会予稿集, 査読なし, 2012, pp. 420-421.
- ③ Yuzo Kimura, Narrowing the gap between L2 teaching and learning motivation: A case study of a PBL classroom in Korea. *Proceedings of the Korea Association of Teachers of English 2012 International Conference*, 査読なし, 2012, pp. 357-360.

[学会発表] (計8件)

- ① Yuzo Kimura *The dynamics of L2 motivation: How L2 learning motivation goes hand in hand with L2 teaching motivation*. The 51<sup>st</sup> JACET International Convention, 2012/09/01 愛知県立大学 (長久手市)
- ② Yuzo Kimura & Jangho Won *Second language acquisition and teaching/learning motivation: A Sociocognitive perspective*. 第38回全国英語教育学会愛知研究大会 2012/08/05 愛知学院大学 (日進市)
- ③ Jangho Won & Yuzo Kimura *Enhancing creativity and motivation through a project poem class*. 第38回全国英語教育学会愛知研究大会 2012/08/05 愛知学院大学 (日進市)
- ④ Yuzo Kimura *Narrowing the gap between L2 teaching and learning motivation: A case study of a PBL classroom in Korea*. 2012 Korea Association of Teachers of English International Conference, 2012/07/07, 淑明女子大学校, 韓国
- ⑤ Yuzo Kimura *Language learning motivation in CA perspective: Interpreting L2 motivation in a junior middle school context in Beijing*. The 50<sup>th</sup> JACET Commemorative International Convention, 2011/09/01, 西南学院大学 (福岡)
- ⑥ Yuzo Kimura *ELT motivation from a complex dynamic system theory perspective: A longitudinal study of classroom L2 motivation in Beijing*. 16<sup>th</sup> World Congress of Applied Linguistics, 2011/08/23, Beijing University of Foreign Studies, China.

⑦ Yuzo Kimura *The dynamism of classroom L2 motivation and second language acquisition in view of sociocognitive perspective: A longitudinal case study*. 2011 American Association of Applied Linguistics, 2011/03/27, Chicago, IL, USA.

⑧ Yuzo Kimura *Teaching motivation in view of Sociocultural Theory: A case study of an elementary school English teacher in South Korea*. The 48<sup>th</sup> JACET Convention, 2009/09/04, 北海学園大学 (札幌)

[図書] (計1件)

Yuzo Kimura (2014). *ELT motivation from a Complex Dynamic System Theory perspective: A longitudinal case study of L2 teacher motivation in Beijing*. In M. Magid & K. Csizér (Eds.), *The impact of self-concept on L2 learning*. Bristol: Multilingual Matters 総ページ数 400頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

木村 裕三 (KIMURA YUZO)

富山大学・大学院医学薬学研究部 (医学)・教授

研究者番号 : 80304559